

2023年内定者アンケート

①河北新報社を知ったきっかけ

（実家で購読していた、地元だから）

- ・宮城県出身なので、実家で朝刊を取っていた。そのため、河北新報社は小さいころから身近にあった。父が新聞好きなのもあり、小学生の頃から河北新報の社説をノートに貼り、分からない言葉や漢字を調べたり、自分の意見を書き留めたりした。
- ・中学生・高校生の6年間で仙台で過ごしており、河北新報社が身近な存在にあった。
- ・仙台市で生まれ育ち、実家で河北新報をずっと読んでいたため、小学生の頃から馴染みのある会社だった。
- ・自宅で河北新報を購読していたため。
- ・地元紙ということもあり、祖父母が購読していたため小さい頃から知っていた。

（就活で）

- ・就職活動において、新聞社を調べるなかで知った。
- ・新聞業界研究と、地方紙合同セミナーへの参加を通して知った。

（大学の研究で、ゼミで）

- ・宮城県内の大学に通っていたため、紙面は図書館やコンビニでよく見かけていた。
「河北新報」を会社として意識するようになったのは大学三年次で、県内のさまざまな業種、職種の企業の方と学生とが交流する旨の授業に参加してからだった。
- ・大学が仙台にあり、大学図書館で河北新報を見たり、街中で河北新報主催の展覧会やイベントに訪れたりしたことがきっかけ。
- ・大学のゼミで河北新報の記事を研究の対象に使用した際に興味を持って調べたことで知った。

（その他）

- ・中学・高校時代は仙台市内に住んでいたため、新聞社として知ってはいたが、初めて記事を読んだのは、東日本大震災の被災地の復興の在り方について学んだ時だったように思う。高校1年時、震災で甚大な被害を受けた石巻市雄勝町でのスタディ・ツアーに参加した際、河北新報社などのメディアが、復旧・復興に関する決定プロセスをいかに報道してきたかを学んだ。
- ・小学生のころ、楽天イーグルスの試合を見に行った際の外野の広告で知った。

- ・河北新報を知ったのは、鎌田慧さんの『地方紙の研究』という本を読んだことがきっかけ。河北新報の名前の由来が「白河以北一山百文」だと初めて知った。新聞名が単に地域を指しているのではなく、「東北のため」という意味合いが込められていることから関心を持った。

②河北新報社を受験した理由、動機

（東北が魅力、東北が好き）

- ・記者として、自分の好きな東北に住み、東北の課題を追求したり、魅力を発信したりしたいと思っていたから。また、東北一人の交流が盛んな仙台に拠点を置く、河北新報社の情報発信力の高さに魅力を感じたから。
- ・以前から東北の自然と文化が好きだったから。
- ・「伝える仕事がしたい、特に大好きな東北のいいところをもっと発信したい」という自分の就活の軸に合っていたから。学生時代、岩手県の農畜産物を関東圏の方に販売する活動をした際、東北のことをほとんど知らなかった人が「東北に行ってみたい!」と笑顔で言ってくれた。自分の力で東北の良さを伝えられたことが嬉しくて東北のよさを伝えられる仕事に就きたいと思った。河北新報社は東北の大黒柱のような存在であり、そして震災時は「死者」という言葉を用いず「犠牲者」という言葉を使用したり、配給のおにぎりを握り続けたりと東北のために全力で取り組んでいたことを知り、私も一員になりたいと強く思った。
- ・東北地方で働きたいと考えていた中で、東北地方の人やモノの魅力をより多くの人に発信出来る新聞、特に河北新報社を強く意識するようになったから。
- ・地元を離れ、初めて出会う人や文化に触れたいと思ったから。
- ・記者の職業に惹かれ、またこれまで多くの時間を過ごしてきた東北の地ではたらきたいと考えたため、受験した。河北新報社は東北6県に自社の取材拠点を構えているが、記者職を志す私にとって、そこでの刺激や経験、学びの多さはとても魅力的だった。そして、宮城県民だけでなく東北で暮らす多くの人々のために奔走する社の風土を知り、やりがいと責任の両方を噛みしめながら成長を続けられる場所だと確信した。

（地元のために、地域貢献できる）

- ・インターンを経験させていただき、技術的な部分で会社に貢献、活躍できることを知り志望した。地元で頑張りたいという気持ちも強かったため、東北のことに携われることも大きな理由の一つになった。
- ・説明会に参加し、地域貢献型の会社だということを知り私も東北、地元宮城のために力を尽くしたいなと思った。
- ・中学生の時に新聞委員を務めたときに学級新聞を作った経験から、新聞社で働いてみた

いという思いがあったため、地元の河北新報社を受験した。宮城県の今を未来に残すことに適した媒体である新聞に携わり、地元である宮城県の活性化に貢献したいと思ったから。特に、地方新聞社は地域が求める情報を届けられるという強みを持っており、今後も地域の人々や企業に求められる存在だと思ったから。

- ・「地元で貢献できる新聞記者になりたい」という思いがあったから。私は、中学入学と同時に他県から仙台に移住した。「震災を経験したにもかかわらず、私の学校の避難訓練はいつも私語で溢れている」「不登校になる生徒が多い」など、周りの友人が気付かない課題が次々と見え、宮城を好きになれずにいた。しかし、「宮城が嫌い」なままで終わりとくなくなかった。宮城そして東北のためにできることは何かと考えたとき、常に地域の支えとなっている河北新報社の記者となり、東北に活気をもたらすことのできる情報を届けていきたいと考え受験した。

（報道姿勢）

- ・声が小さい立場の人に日頃から寄り添う新聞社で働きたいと思ったから。
- ・地方紙として地域に根ざして報道を行っている側面と、ブロック紙として広く強い影響力のある発信をしている側面を持っているところが、ほかの新聞社にはない魅力だと思い受験した。
- ・『河北新報のいちばん長い日』という本を読んで、会社自体が被災をしながらも新聞を発行したことを知り、感銘を受けた。また、紙面を読むと毎日どこかしらに「東日本大震災」の文字がある。震災から12年が経過しても、地域目線で震災報道を続けていると感じたことも理由の一つ。
- ・新聞を呼んでいた中で、毎日東日本大震災に関する記事が掲載されており、ここなら震災の「今」を伝え続けられると思ったから
- ・第一に、全国紙でもなく、県紙でもない「ブロック紙」という立場は、地域の抱える課題を、その地域特有の問題ではなく、一圏の問題として提示し、圏内の他地域と状況を比較したり、潜在的課題を見つけたりする上で、有益だと考えたからだ。第二に、私は原発や米軍基地などの国策、あるいは民営国策をめぐる課題について、地方自治、住民自治の観点から調査報道をしたいと考えており、東北という、国策の現場を数多く抱える地で報道に携わることは、やりがいのある仕事だろうと思ったからだ。

③入社試験で力を入れたこと

（筆記、作文、面接の対策、企業研究など）

（時事に敏感に～筆記）

- ・筆記試験のために自分の興味に偏らず、幅広い情報を入手するように心がけた。
- ・時事問題に関して、単語だけを覚えたり浅い理解で済ませたりしないように気をつけた。

具体的には、用語の説明や背景が具に記されている教科書タイプのものを繰り返し読んでから一問一答タイプのもので取り組んだり、新聞を読んで分からない箇所があればすぐに調べたりした。

- ・筆記試験対策は、時事ニュースに出てきた地名や人名を頭に入れておくようにした。
- ・東北の出身ではないため、自分なりに東北について知っていくことに力を入れた。
- ・東北地方に関する試験問題が出題されると聞いていたので、過去 1 年ほどの東北地方での重要な出来事の記事を読み返した。「2022 みやぎ回顧」という連載記事があったので宮城県内の出来事についてはそれを参考に振り返りを行った。

（何度も書いてみる～作文）

- ・題材探しとして、自分の過去を書き出し、これまで経験したことや人との出会いを振り返った。自分でテーマを設定し作文を書いた後は、一つの出来事を、切り口や重点を変えて、異なるテーマで書いた。家族に何度も添削をしてもらいながら、内容や表現を修正した。試験では、開始と同時に題が提示されるが、予め決めていた題材、5 つほどの中から、題にもっとも合う題材を選んで作文を仕上げた。
- ・大学の同級生や先輩たちと作文練習をする自主ゼミを開き(週に 1 回)、互いの作文を講評し合うなどして力をつけた。
- ・新聞や本を読み、「誰にでも理解できる文章とは何か」を学んだ。
- ・短期で力を伸ばせる分野ではないと思い、普段から自分の考えていることを言語化することを意識して過ごした。
- ・作文試験の意図は「作者(解答者)が日々、どんなことを感じ、どのように考えているか」を問うことだと聞いていたため、あまり固く考えず、題目に対して思うこと、感じることを素直に言葉にするよう心掛けた。河北新報社の出題は漢字一字が多く、書きはじめて詰まることも少なくないが、その漢字から連想される言葉を軸に自分のものの見方や過去のエピソードを組み込むという書き方をよくしていた。また河北新報社の過去問だけでなく、傾向が似ている他社の問題や毛色のちがう小論文形式の問題にも取り組み、視野を広くもつことを意識した。
- ・週に三回ほど本番と同じ時間を測り作文を書いていた。その際の作文テーマは、他社を含めた過去問のお題を参考にしていた。また、社説要約もたまにしていた。
- ・作文は、『マスコミ就活読本』にある過去の作文のお題や、新聞に頻出する漢字をテーマにして練習した。1 つの漢字や熟語から関連付けられる話題を見つける練習、準備をした。
- ・色々なテーマで制限時間内に作文を書く練習をしていた。その際、いくつかエピソードをあらかじめ用意していた。そして、自分で書いた作文を色々な人に批評してもらい、文章力を高めていた。

（練習重ねる～面接）

- ・就活生同士で面接練習ができるコミュニティーに参加して模擬面接を行っていた。
- ・大学のゼミの先輩や同級生に面接練習を何回も付き合ってもらった。試験本番までの約2週間で5回ほど面接練習をした。
- ・面接で聞かれそうな質問を全て(約50個)ノートにまとめ、本番中に緊張で頭が真っ白になってしまった場合でも回答できるよう、何度も練習した。
- ・聞かれたことに対して簡潔に伝えることを意識した。1つの質問に対して、自分が経験した具体的なエピソードを1つずつ加えられるように、自分が学生時代に学んだことを振り返り、要約した。
- ・面接対策は、必ず伝えたいことをノートにまとめていた。
- ・私はこれまで東北に地縁がなかったので、選考のたびに地元の方とお話しして、面接で話せるネタをつくっていた。知らない土地での緊張をほぐすために、地元の方と実際に話し前向きな気持ちになるようにしていた。
- ・面接およびエントリーシートで最も注力したのは、それぞれの質問にはどのような意味・目的があるのかを逆算してから答えることだった。「河北新報社を志望した理由を教えてください」という問いであれば、まず「河北新報社のどこ・何に惹かれたか」という企業についての答えと「河北新報社（の希望職種）ではたらく上で必要な能力のうち、自分は何を、どんな風にもっているか」という自分自身についての答えを用意した。そのうえで、全国紙ではなく地方紙である理由、出身県ではなく宮城県ではたらきたい理由、他の媒体ではなく新聞を選んだ理由などを明確にし、論理性・客観性と熱意の両方に磨きをかけた。
- ・エントリーシートの内容から質問を予想し、回答を準備したが、あまり一字一句の暗記にならないように意識していた。質問の中でも、志望動機や自分が河北新報社でやりたいことに関するものはしっかりと答えられるようにした。
- ・自分の個性を出すようにした。普通の言葉だと読み流されてしまうようなものも、少しユーモアあふれる言葉に変換してみることで、他の人とは違う自分らしさを見ていただけるのかなと思う。
- ・友人や先輩に何度も練習をしてもらった。
- ・面接練習では新聞のことはもちろん、先端技術のことやその技術がどのように新聞に落とし込めるかなどの自分の考えを伝えられるように練習を行った。

（とにかく、新聞を読む！～企業研究）

- ・面接当日の朝刊まで(オンラインでも)しっかり読み、地域の大きなニュースをおさえていた。
- ・全国紙、ブロック紙、県紙を読み比べた。朝刊の第一面や、社説、連載記事を中心に確認したほか、各社のウェブサイトや、ウェブ配信記事や、特集企画などを調べた。記事を読み比べる際は、何をどう書いているのかだけでなく、何を「書いていない」のか、という

点に注意した。そうすることで、ニュースの切り取り方や報じ方、ニュースに対する関心度合いの違いに気づけるようになった。

- ・大学の図書館で、震災の翌日から 1 カ月半までの河北新報を読み、印象に残った記事や見出しをノートにまとめ、自分にしか言えない河北新報社のよさ、魅力を伝えられるようにした。同じ記事で他社の新聞と河北新報を読み比べて、考えの幅や視野を広げた。河北新報社のホームページを隅々まで見て、自己分析で得た就活の軸と重ねて志望動機を書いていた。
- ・河北新報を購読し、気になった記事をファイルにまとめて紙面の特徴を学んでいた。
- ・新聞を読むことはしていた。気になった記事はしっかりと調べて感想を自分なりにまとめた。今まで何を頑張ってきたのかなど自分自身が経験してきたことを振り返った。
- ・忙しい日でも、新聞の一面や社説は読むようにしていた。
- ・早い段階から新聞を毎日見るようにした。また新聞だけでなく河北新報オンラインも欠かさず見るようにした。
- ・企業研究のため、情報収集に努めた。就活イベント・(数年前になるが) インターンに参加し、OG 訪問も行った。また、他の企業や職種のインターンや説明会にも参加した。それによって、なぜ新聞業界か、なぜ河北新報社か、なぜ記者職かという部分を明確にすることができた。
- ・また、とにかく河北新報を読むことにしていた。毎日でなくとも紙とオンライン両方を読み比べ、河北以外の新聞とも見比べた。そうしたことが、筆記試験や面接試験の対策につながった。
- ・インターンシップに参加し、河北新報社について気になる点を人事部や先輩記者の方々に質問して学んだ。
- ・企業の採用 HP を入念に読み、自分がやりたいこととマッチングしているか確認した。
- ・全国紙ではなく地方紙を選択した理由を明確にできるよう、企業理念や事業内容を読み込んだ。

④入社を決めた理由

(報道機関としての姿勢に共感)

- ・新聞を読んだり、説明会や OG 訪問に参加したりしたことで、東北の復興を真剣に考える社の姿勢を感じ、共感したから。また、人事の方や OG の方、面接官の方が私の話を真摯に聞いてくださり、このような方々と一緒に働いてみたいと感じたから。さらには、今後の新聞業界に必要不可欠なオンライン化という点において、ウェブ上で多くの人に記事を読んでもらうための試行錯誤を様々に行う、河北新報社の姿勢に将来性を感じたから。
- ・地域の人々をいちばんに考える地方紙の姿勢と、発信力の大きさのどちらもあると考えた

から。

- ・説明会に参加させていただいた時や会社見学をした時に自分にあっているなと思ったし、河北新報社で頑張っていきたいと強く考えたから。
- ・一次面接から鋭い質問があったり、最終面接では多くの、厳格な面持ちの役員が構えていたり、試験を重ねるたびに河北新報社という会社の大きさやそこではたらくことの責任の重さをつよく認識するようになった。それでも、容易ではない仕事や厳しい環境に身を置くことでのみ得られる感情や出逢いがあると考え、入社を決めた。
- ・宮城県内はもちろんのこと、東北 6 県で取材が出来るという他社にはない取材範囲の広さに強く惹かれたから。
- ・インターンシップに参加した中で、人との縁を大切につないでいながら取材をしている姿勢を強く感じ、河北新報でしか書けない記事があると感じたから。
- ・河北新報社がその支局を置く東北地方には、訪れたい現場がたくさんあるからだ。
- ・東北のために貢献できることが多くある。

（社員が温かそう）

- ・社員の方々の温かさも入社を決めた上の理由になった。
- ・河北新報を読んだり、会社説明会や面接で社員の方々とお話をさせていただいたりするなかで、社員の方々が良い意味で“東北びいき”であるところがとにかく素敵だと思った。私は東北に縁もゆかりもないが、河北新報社の一員として東北のことを好きになっていきたいと強く思ったため入社を決めた。
- ・インターンシップへの参加を通して、河北新報は面倒見が良さそうな雰囲気があると感じた。また、インターンシップで荒浜小学校や名取市閑上地区を訪れ、地域の孤立など多くの問題があると知り、記者として解決の一助になりたいと思ったから。

（ワクワクしたから）

- ・面接を重ねていく中で、「絶対に河北新報社で働きたい」という想いが強くなった。面接官の方は他の会社の面接よりも、自分の個性(性格や学生時代取り組んだことなど)、「入社してどんなことがしたいか」を丁寧に聴いてくれた。そのおかげで、河北新報社で挑戦したいことが自分の中でどんどん膨らみ、ワクワクした。就活の面接で「ワクワク」というプラスの感情を抱いたのは河北新報社だけだったので、入社を決めた。
- ・これまで縁のなかった地域で記者として初めて出会う人、ものとつながりをつくっていきたいと思った。また選考で仙台に通う中で、仙台や宮城の人々、土地が好きになり、お世話になったので、次は私が地域に貢献したいと思ったから。
- ・就職活動を始めた段階で志望度が最も高かった。情報を伝えて読者の知的好奇心を満たすだけでなく、多種多様な事業を開催して宮城県に元気を与えられることが強みだと感じたから。

- ・河北新報社が第一志望であったから。
- ・ES、作文、面接を通して、最も自分らしく考えを伝えることができ、それを受け取ってもらえたと感じたから。
- ・選考を通して河北新報社ではたらかたいという思いが強まり、内々定の返事をいただいたときはその場で承諾をした。

⑤入社したらどんな仕事をしてみたいか

（経済、スポーツ、農業、文化、介護、震災、原発）

- ・いくつかのテーマについて長期取材に取り組みたい。現時点で特に関心のある分野は、日本社会における民族的マイノリティの人々を取り巻く、人権や、言語・文化継承の状況である。また、福島県出身で原発事故を経験した者として、福島第一原発事故の廃炉作業に関する報道は責任を持って取り組んでいきたい。原発事故に留まらず、現在の原発政策の現場を、地方自治の観点から取材し、民営国策の諸課題について議論する機会を創っていきたい。
- ・東日本大震災に関する取材、特に遺族や被災者の方の生の声を聞き、届けることで防災や減災に関する意識づけを促せるような記事を書きたい。
- ・野球が好きなので、プロ・アマ問わず機会があれば現場に足を運んで取材をしてみたい。
- ・被災地取材専門の記者として、読者が震災の教訓を自分事として捉えることのできる記事を書きたい。また、読者がほっと一息つくことのできる小さくも温かい地域情報を報道して、東北人の生活の支えになりたい。そして、どの部の所属になっても地元に貢献できる記事を書き続けたい。
- ・経済分野の担当記者になり、とくに日陰に隠れる中小企業や個人商店の取材をしたい。中小企業や個人商店はさまざまな商品や日々の暮らしを支えるうえで重要な役割を担っているが、その役割や仕事が大衆の目に触れにくく、意識されないということはよくある。また経営の面でも、昨今の物価高で受ける影響がより大きかったり、若い労働者の確保が難しかったり、あるいは外部からの支援を受けづらい土壌になっていたり、多くの困難や問題を抱えている状況も少なくない。そのため、比較的力の限られている中小企業や個人商店に「外の視点」を加えることで、当該者の手助けをするだけでなく、より多くの人が自分自身の消費行動や経済分野に関心をもつきっかけを創っていきたい。
- ・自分自身、スポーツをすることや観戦することが好きであるため、スポーツの取材に携わりたいと考えている。スポーツ取材を通して、地域を盛り上げることや創生の一助になりたいという思いがある。また東日本大震災に関する報道は、発生当時より地方紙の立場から河北新報社がかかわっている特別なものだと思うため、携わってみたい。
- ・こども食堂と東北の農業や漁業の情報発信を両立することで、こどもと地域、消費者と生

産者をつなぐ記事を書きたい。

- ・私は東日本大震災の被災経験はないが、河北新報の記事を読み、私のような被災経験のない人にもっと震災について知ってほしいと考えるようになった。被災経験のない人へ向けた震災報道にも、これからたくさんの経験を積んで取り組みたい。
- ・介護などの家庭内で起きる問題に関心があり、事件事故の背景の取材に取り組みたい。東北では、震災後の集団移転や少子高齢化で、地域のつながりが希薄になっているところが多くある。そうしたことが原因の一つとなり、介護殺人などの事件が起きるのではないかと思う。事件の背景を掘り下げながら、現在の東北の課題とも関連づけられるような記事を書きたい。
- ・エネルギー政策の取材と東北の魅力を発信できる取材をしたい。具体的に、前者では、政府の原発政策に対する東北の人々の声や、再生可能エネルギー事業の課題とそれに向けた取り組みを発信したい。後者では、東北のお祭りや伝統行事を取材したいと考えている。

（イベント開催、地域活性化）

- ・東北 6 県の民俗芸能や音楽に触れるイベントを企画してみたい。東北地方にはまだ知られていない魅力あふれるものが多くあると学生時代の活動を通して知った。特に民俗芸能や音楽は東北にしかない出せない味があると思う。東北は若者の都市部への流出が多いことも問題であることから、若い世代の方にも興味をもってもらえるよう、SNS と新聞のコラボを駆使して、老若男女問わず楽しめるものを作り上げたい。
- ・どの部署に配属されても様々な仕事に挑戦したい。地域の住民や企業の期待に応えた事業を展開したいので、ニーズを汲み取るために、地域の方と関わりながら働きたい。

（会社を支える）

- ・会社のしっかりとした強い土台をつくりあげたいと考えている。与えられた場所で何ごとにも一生懸命に全力で取り組んでいきたい。
- ・記者が書いてきた記事をより見やすいようにレイアウトすることや見出しや写真の配置などし、読者の方々に楽しんでもらえる、また読みやすい新聞を作る手助けをする仕事をしたい。

⑥就活生へメッセージ

（考えるな、動け）

- ・考える前に、動け。もしくは、考えつつ、同時に行動すると良い。私の場合、自分が何をしたいのか、どんな企業がいいのか、頭の中で考えても答えは決まらなかった。インターン、就活イベント、OB・OG 訪問など、とにかく実際に体験したり、話を聞いたりする

事で、答えが見えてきた。時間はあっという間に過ぎる。後悔のないよう、企業研究や試験対策にあらゆる手を尽くすべき。そして、手を尽くした後は（そうできなくても最後は）、「なるようになる」くらいの気持ちで、あまり気負わずに試験に挑んで！

- ・自分の人生を左右するのは、自分の行動だと考えている。周りの同級生が就活に動き出すのを待っているのではなく、自ら進んで就活の情報を共有するつもりで積極的に行動すれば、道は開けると思う。そして、自己分析も大切。自分がどういう性格なのか、自分は将来なにを成し遂げたいのかを明確にすることで自信がつく。挫折しても自分をせめず、「この失敗は後に必ず活きる」と信じて、5年後の自分を想像しながら受験に臨むと、気持ちが前向きになると思う。辛くなったら、周りの人に頼ることも重要。就活生の皆さんの健闘を心から祈っています！

（自分らしさ、やりたいことを見失わないで）

- ・就活を通して私が一番重要だと思ったことは、自分らしさを大切にすること。小さなことでも自己分析を深め、更新させていけば自分らしさが出てくるし、面接にも等身大で挑むことができる。また、うまくいかなかった面接も必ず次に生きてくる。就活中は周りと比べたり焦ったりすることがあるかもしれないが、自分らしさを見失わず、前向きにとらえてみてください。応援しています。
- ・新聞社の入社試験は募集人数も少ないし、作文試験や時事問題の対策もしないといけないため、不安があると思う。私は正直、3月まで新聞社の受験は諦めていましたが、自分が本当にやりたい仕事は何か考え直し、そこから猛勉強した。今では、挑戦してよかったと心から思っています。ぜひ就活生の皆さんも、自分のやりたいことを最優先に、悔いのない就職活動をしてほしいと思っています！応援しています！
- ・色々な選択肢がある中で、本当に自分がしたいことややりたい自分を見つけることが大事だと思う。何事にもチャレンジしてみて、色々な方と関わることでご縁があったり、自分を見つけることができるかもしれない。不安なことも多くてもしっかりと準備して自信をもって頑張ってください。
- ・知識はあった方が良くないと就職活動を通して思った。そのために新聞を活用して。たくさん情報を得られる。1番大切なのは気持ち。振り返りをすることは大事だが落ち込むことはマイナスになる。自分を信じてあげてひたすら前に進んでいってください。応援してくれてる人は身近に沢山います。頑張ってください。
- ・私自身、周りの友人が次々と内定を取っているのを見て、焦ることも多くあった。就活は結局、自分との戦いだと思います。諦めることなく受け続けていれば、ありのままの自分を「良い」と思ってくれる会社がきっと見つかると思う。ぜひ一人でも多くの方が新聞業界、そして河北新報に興味を持っていただければ幸いです。
- ・就職について真剣に考えることは、みなさんのこれからを考えることに等しい。どんな大人（社会人）でありたいか、どんなことに価値を見出して生きていきたいか、どんなひと

と一緒に居たいと思うかなど、ときにはゆるく雑多に、自分の人生を俯瞰してみるとよいかもしれない。

- ・自分自身と向き合う時間が長くなる。大学で経験してきたことはとても大切なことだが、その事実だけを伝えるのではなく、経験を通して学んできたことを自分ならどのように活かすことができるかを伝えることが大切だと思う。頑張ってください！

(ワクワクを見つけて)

- ・自己分析の中で自分が一番ワクワクすることを見つけるのが就活で大切だと思う。そうすれば、きっと自分に合う業界、会社が見つかる！ 長くて苦しい時期だとは思いますが、時々息抜きをしながら、まっすぐに自分の想いを伝えて、納得のいく就活をしてください！応援しています。
- ・新聞を読むことが 1 番の企業研究・理解になるし、新聞社以外の就活においても時事の面などで役立つことが多いので、新聞を読む習慣を持つことは大切になると思う。「ここで働きたい」という熱意をどう伝えるかが大切になると感じたので、自身の思いをどう表現するか意識すると良いと思う。
- ・メディア環境の変容が著しい今日、既存メディアの立ち位置の変化は、報道の仕事に携わる手段の多様化をもたらしている。こうした中、記者を志しても、目指すべき方向が定まらず悩むこともあるかもしれない。そんな時には、「否定疑問」を使った問いが役立つ。例えば、問いの立て方を、「なぜ新聞社なのか」ではなく、「なぜネットメディア“ではないのか”」に変えたり、「なぜ地方紙なのか」ではなく、「なぜ全国紙“ではないのか”」に変えたりすると、ごまかしていた部分や、視野に入っていなかった部分が可視化され、自分は何をしたいのかに対する考えに、少しずつ輪郭が生れ、言語化できるようになるのではないかと思う。
- ・内定をもらうための十分条件はない。「みんながやっている」ことを真面目にやることで得られるのは、束の間の安心だけだったように、就活を終えた今こそ思う。就活動向を支配するエージェントや採用側の出す情報に翻弄されることなく、ご自身とじっくり向き合える貴重な時間を、有意義に過ごしてください。

以 上